

聖書日課 『からし種』 2023.4.16-4.23

<p>4月16日 (日) I サム 30章</p>	<p>「ダビデと四百人の兵は追跡を続けたが、二百人は疲れすぎていてベソル川を渡れなかったので、そこにとどまった」(10節)。「川を渡った者は、不可能を可能にする神の奇跡にあずかった。みんなも、体験してほしい。でも、川を渡りきれなかった者たちのために、イエスさまが世に来られたことも覚えてほしい」とある宣教師が涙ながらに語ったことがある。</p>
<p>17日 (月) I サム 31章</p>	<p>「ギレアドのヤベシュの住民は、ペリシテ軍のサウルに対する仕打ちを聞いた。戦士たちは皆立って、夜通し歩き...」(11-12節)。ギレアドのヤベシュの住民は、サウルがアンモンの王から救ってくれたこと(11章)を忘れていなかった。これはサウル王の最初の戦果でもあった。その後神に従えず葛藤に苦しみ、惨死したサウルに今、神の憐れみが注がれた。</p>
<p>18日 (火) II サム 1章</p>	<p>「ダビデはサウルとその子ヨナタンを悼む歌を詠み、『弓』と題して、ユダの人々に教えるように命じた」(17~18節)。サウル王家とダビデ王家の対立を避けようとするダビデの苦心はわかるが、サウルにとどめを刺したアマレクの若者を打ち殺したことを思うと、この追悼歌にも作威的なものを感じてしまう。キリストの血以外、誰の血によっても平和は実現しない。</p>
<p>19日 (水) II サム 2章</p>	<p>「アサエルが倒れて死んでいる所まで来た者は皆、立ち止まったが、ヨアブとアビシャイはアブネルを追い続けた」(23~24節)。末の弟を殺したアブネルをひたすら追いつけるヨアブとアビシャイ兄弟の気持ちを想う。だが、戦争では自分の兄弟も、仲間の、また敵兵の兄弟も殺される。「いつまで剣の餌食とし合うのか」(26節)の答えは今も、風に吹かれて。</p>

聖書日課 『からし種』 2023.4.16-4.23

<p>20日 (木)</p> <p>Ⅱサム 3章</p>	<p>「パルティエルは泣きながらミカルを追い、バフリムまで来たが、アブネルに『もう帰れ』と言われて帰って行った」(16節)。サウル王家の実権を握り尊大に振る舞うアブネルと、ダビデとの駆け引きの中、聖書はこの一節を記す。「サウルの娘」として連れ戻される先のダビデはもはや昔のようではなからうが、そんなミカルとの別れを惜しむ前夫の姿が美しい。</p>
<p>21日 (金)</p> <p>Ⅱサム 4章</p>	<p>「アブネルがヘブロンで殺されたと聞いて、サウルの息子イシュ・ボシエトは力を落とし、全イスラエルはおびえた」(1節)。「サウル王家対ダビデ王家」の構図が勝手にできて行く中で、ヨナタンの幼い息子が痛みを負い、サウルの息子も殺される。わたしたちが他の誰かとの間についつい作ってしまう「隔ての壁」を取り壊すため、キリストは十字架にかかられた。</p>
<p>22日 (土)</p> <p>Ⅱサム 5章</p>	<p>「ダビデは三十歳で王となり、四十年間王位にあった。七年六ヶ月の間ヘブロンでユダを、三十三年の間エルサレムでイスラエルとユダの全土を統治した」(4~5節)。ダビデがユダの王となったのは三十歳の若さ。そこから苦労してイスラエルを統合。失敗も多く、主の祝福も叱責も、裁きさえ受けた四十年間だが、常に「主は彼と共におられた」(10節)。</p>
<p>23日 (日)</p> <p>Ⅱサム 6章</p>	<p>「主の御前でダビデは力のかぎり踊った」(14節)。荒れ野の旅を導いた「神の箱」は、「主、我らと共にあり！」の象徴であり、不思議な力を帯びていて、人間のコントロールの及ばないものだった。私たちは、主なる神を自分の願いの方向に導こうとする間違いを犯していないだろうか。ダビデは「神の箱」の前で喜び、踊るほかない自分の小ささを知らされたのだった。</p>